

モード・ダイヴァーの帝国主義幻想（その3）

—帝国には白人女性の居場所もあった—

小西真弓

帝国軍人の妻としてインドに滞在したモード・ダイヴァーのアングロ・インド小説には、「遊び」に夢中になるステレオタイプ的なメムサーヒブと、「インド女性のため」の医療や教育活動に献身するイギリス女性双方が描かれている。19世紀末から20世紀初頭の年代に設定されている帝国ロマンス小説『ヴィクトリア勲章のデイズモンド大尉』(*Captain Desmond, V.C.*, 1907年)、『デイズモンドの娘』(*Desmond's Daughter*, 1916年)では、軍国主義的な英雄を支えるメムサーヒブたちの帝国支配への間接的献身が称えられているが、インドのナショナリズムが高まった第一次大戦後の物語『若者の船』(*Ships of Youth*, 1931年)以降の小説では、「インド女性のため」の「仕事に献身する」メムサーヒブたちの「姉妹愛」が強調されている。彼女たちの反フェミニズムにフェミニズムが入り混じったような言動は「帝国に白人女性の居場所はない」という説に反駁するもので、帝国主義に賛同しつつその方針に抵抗しなかった作者の心情が投影されている。本稿では、第一次大戦前後のイギリスとインドの歴史的背景を念頭に、上記の小説を通してそのようなダイヴァーの矛盾した思想を考察してみた。

キーワード： モード・ダイヴァー、メムサーヒブ、国際的姉妹愛

*テキストには、Maud Diver, *Captain Desmond V.C.* (Edinburgh: William Blackwood & Sons, 1909); *Desmond's Daughter* (New York: G.P. Putnam's Sons, 1916); *Ships of Youth: A Study of Marriage in Modern India* (Edinburgh & London: Blackwood & Sons, 1931) を使用した。本文中の括弧内の題名の省略表記、頁数はすべてこれらの版によっている。

序

教育長官の夫の赴任先、西アフリカのイギリス領で「白人女性の居場所はない」と告げられたメアリー・エリザベス・オーク (Mary Elisabeth Oake) の回想録のタイトルは、長年イギリスの植民地において、これといった仕事もなく白人社会に閉じこもった人種差別的なメムサーヒブ (植民地の奥方、広義にはインドのイギリス女性) たちが、白人男性と原住民との仲を疎遠にし帝国経営を妨げたことを批判する常套句として利用された。¹⁾ しかし

1) この点に関しては、Helen Callaway, *Gender and Empire: European Women in Colonial Nigeria* (Basingstoke: Macmillan, 1987) 5-6参照。ちなみにオーク夫人は、滞在先のブエア (Buea) の風土が苛酷で、公務もなければ家事も原住民任せにする自分の生活はあまり意義のないものであることを認めている。しかし一年あまりの滞在とはいえ、彼女は現地の少女に裁縫を教えたり、夫に伴って周辺の学校や教会施設を視察し、アフリカ人をいかに教化するべきかという問題を回想録によって問いかけている。彼女のアフリカ観は文化多元主義的で、自民族中心主義的ではないような印象を受ける。Mary Elisabeth Oake, *No Place for a White Woman* (London: Lovat Dickson, 1933) 参照。

1970年以降、植民地に滞在した欧米女性に関する様々な研究書が刊行され、メムサーヒブの中にも、帝国を維持するための公的な活動に献身したり、「世界的な姉妹愛」(global sisterhood)を標榜し、「白人女性の責務」を果たそうとした人物も存在したことが明らかにされつつある。そのためか、英文学研究の対象としてあまり注目されなかったメムサーヒブ作家のフローラ・アニー・スティール (Flora Annie Steel, 1847~1929年) やモード・ダイヴァー (Maud Diver, 1867~1945年) らの著作も再版されるようになった。確かに帝国主義に組み込まれていた彼女たちの言説には、マーガレット・ストローベルが指摘するように、²⁾ 自民族中心の母権的な帝国主義観が反映されている。しかし一見、同類に思われるようなメムサーヒブたちの帝国主義思想や、フェミニズム観、インドの文化や原住民に対する見解も、数々の著作を掘り下げて読めば、その微妙な違いが感じられる。それは無論、彼女たちの生い立ち、伴侶の立場が異なる故であろうが、一個人としてインドの文化や原住民に対する見解の相違の問題でもある。本稿では、モード・ダイヴァーの『ヴィクトリア勲章のディズモンド大尉』(*Captain Desmond V.C.*, 1907年)、『ディズモンドの娘』(*Desmond's Daughter*, 1916年)、『若者の船』(*Ships of Youth*, 1931年)を紹介し、作者がスティール夫人のようなフェミニストとは少々異なるインド女性観を呈しつつ「白人女性の責務」を唱え、「帝国に白人女性の居場所はない」という説に反駁していることを考察してみたい。

I

19世紀末に20数年間インドに滞在したモード・ダイヴァーが、どれほどの数のイギリス女性と現地で遭遇したのか、彼女に関する伝記的資料が少ないので定かではない。しかし、彼女のインドを舞台にした数々の著作に様々なイギリス女性が登場していることから、彼女が出会ったり、噂を耳にしたメムサーヒブの数はかなり多かったと推定される。その見聞を基に執筆された『インドのイギリス婦人』(1909年)によれば、インドに滞在するイギリス女性は大まかに二つに分類されるという：

インドのイギリス女性は、大雑把に二つのグループ——仕事に献身する、あるいは「遊び」に夢になるのどちらかに類別できる。両者のたった一つの共通点は、いずれも熱狂的だということだ。その他に関して、彼女たちの生活は両極のように対照的である。彼女たちは、自分たちの定められた場所に隣接して住みつつ行動する。異なる目的、願望、経験という渡ることのできない溝を挟みながら、彼女たちは多少なりとも真心から手を握ったり、陳腐な言葉を交わす。そして時折お互いに流浪の身だという共感に引きずられて、他方のグループの領域に足を踏み入れる。しかしそれでも、両者の交流はほとんど見せかけに過ぎない。³⁾

2) Margaret Strobel, *European Women and the Second British Empire* (Bloomington: Indiana UP, 1991) 71参照。

3) Maud Diver, *The Englishwoman in India* (Edinburgh and London: William Blackwood & Sons, 1909) 91.

「遊び」に夢中になるインドのイギリス女性と言えば、夏季にインドの避暑地シムラやガールマルグに移住して社交を楽しむ有閑夫人やその娘たちが代表であろう。彼女たちは暇を持て余せば、アングロ・インド社会の同胞についてのゴシップで気を紛らわしたが、中には若い士官や妻帯者を誘惑して不倫関係を楽しむ人物もあった。また、「夫探し」のためにイギリス本国から縁故を頼って到来した、いわゆる「漁船団」(Fishing Fleet) と呼ばれた独身女性たちも多くがこの類に分類される。彼女たちの関心は、非常時でもない限り、インドの政治問題に向くことがなかった。使用人として身近にいる原住民たちはただの「黒人」であり、彼らの生活や文化ともほとんど無縁であった。1880年代にシムラを取材したキプリングは、そのようなメムサーヒブたちの生活ぶりをユーモアと諷刺を交えて描いた『高原平話』(Plain Tales from the Hills, 1888年) を出版し、この物語に登場するホークスピー夫人やマロウエ夫人は、軽妙浮薄な生活を送るメムサーヒブのイメージをイギリス本国の読者に植えつけた。その影響もあり、キプリングに続く多くのアングロ・インド小説家が——帝国主義に対する賛否に関わらず——メムサーヒブたちの無為な生活や人種差別的な態度を浮き彫りにし、彼女たちの存在がイギリス人とインド人の友好的な関係を損ない、しいては帝国の破壊をもたらしたかのような印象を与える作品を執筆した。⁴⁾

メムサーヒブの一人であったダイヴァーが、彼女たちを否定的に描いたアングロ・インド小説に対して気まずい思いを抱いたことは想像に難くない。しかし、帝国主義に賛同する彼女は、在印イギリス女性が「遊び」に夢中になることには寛容になれても、不倫を楽しんだり、インド人を蔑んで人種間の緊張を悪化させることには危機感を覚えたに違いない。それは『若者の船』の中で、任務に励む若い士官たちを次々に虜にしようとするアイナ・スレードが、「いかに着飾り男の情念をそそって楽しむか」(SY., 173) しか念頭にない「生まれながらの妖女」(born siren), 「略奪女」(predatory petticoat) として描かれていることから窺い知れる。夫がペシュワールの旅団長 (brigadier) であるにもかかわらず、彼女は国境を守る帝国支配者にとって迷惑千万な存在でしかない。彼女のような貞操観念の低いメムサーヒブは、ダイヴァーの他の小説にも度々登場するが、⁵⁾ 彼女たちの不品行は多少なりとも、実態を反映したものであろう。それは自らメムサーヒブであった女性作家がしばしばアングロ・インド社会内の不倫問題を取り上げていることによって裏付けられる。⁶⁾

ダイヴァーが、スレード夫人のようなメムサーヒブに抱いた気持ちは、「女が帝国を破壊した」というような見解に通じることは否定できない。しかし不倫はさておき、在印イギリ

4) Allen J. Greenberger, *The British Image of India: A Study in the Literature of Imperialism 1880-1960* (London: Oxford UP, 1969) 102-6参照。

5) 例えば、『若者の船』では、ファークア夫人が、妻と3人の子供をもつ士官クロード・マンセルと浮気を楽しみ、彼の妻に衝撃を与える。『夢は果てしなく』(*The Dream Prevails*) に登場するパメラ・ペドレイ・バーンは、ペシュワールの長官ジャスパール・イングリストと不倫関係に陥って、彼の妻クレアの心臓病を悪化させる。

6) スーザーナ・ハウはその代表的な作品として、Barbara Wingfield-Stratford の *Beryl in India* (1920年) と Christine Weston の *Indigo* (1944) を取り上げている。Susanne Howe, *Novels of Empire* (New York: Columbia UP, 1949) 46参照。

ス女性が「遊び」に夢中になることについては、それが環境のなせる業であるとして次のように弁解している：

イギリス女性は外国行きの蒸気船に足を踏み入れた途端、夢見た以上により自由で明るく、怠惰な世界に自分がいることに気づく、彼女に要求されるのは、ただできる限り楽しく時を過ごすことであって、全く新しく面白い環境で難しいことを達成することではない。三週間で彼女は、イギリス本国にいる友だちが倍の時間で会うよりも沢山の様々な男女と親しく接するようになる……

目的の駐屯地に到着した後、彼女は真剣な面持ちでデビューする。訪問者やお誘いは絶えることなく、彼女の朝は大忙しだ。午後はテニスや乗馬、園遊会に出るよう要求される。ダンスや夕食会は、彼女の貴重な最低限の休息さえも減らしてしまう。ひと夏に12から14回ダンスに出かけることも珍しくない。そこへ行けば、若くて情熱的なお相手が沢山いる……

実際に忠実な園丁から手渡される沢山の花を生けること以外に、アングロ・インドの女性のすべき家事は何もない……これらすべてが、彼女の感情的で快樂好きな側面を発達させ、より高邁な目的や厳しい自己修養を理想とするビジョンを曇らせてしまう……⁷⁾

イギリス女性の英領インドでの生活が、無為で快樂的になりがちであったことは、実際のメムサーヒブの証言からも否定できない。⁸⁾ しかるに、ダイヴァーがそれを弁解するのは、自らの回想が重なる充実感のない彼女たちの生活に同情を禁じ得なかったためであろう。また、ダンスパーティーで、いわゆる「天国生まれ」(heaven-born)と呼ばれたインド高等文官やエリート軍人を射止めたとしても、メムサーヒブのインド生活には、本国では想像もつかないような試練も付き物であった。このことは、『インドのイギリス女性』の中でも触れられているが、とりわけアフリディ、パターン、オラクザイ部族に襲撃される危険性が高かった北西辺境州を舞台にしたダイヴァーの小説に生々しく描かれている。

II

『ヴィクトリア勲章のディズモンド大尉』や『ディズモンドの娘』は、モード・ダイヴァーがメムサーヒブの厳しい生活の側面を描いた代表作である。北西辺境州と言えば、キプリングをはじめとする多くのアングロ・インド小説家によって、国境を守るイギリス軍人の献身や「男らしさ」を描ける物語の舞台として設定されているが、彼らの小説を読む限りそこに「白人女性の居場所」があったとはあまり感じられない。駐屯地の女性や子どもたちは、反徒から守られるべき存在であり、場合によっては足手まといであった。『ヴィクトリア勲章のディズモンド大尉』に登場する「遊び」に夢中になるタイプのイギリス娘イープリンの物語には、そのような事情が浮き彫りにされている。

イギリスの地方都市から団体でインド旅行にやってきた「人生経験の浅い自己中心的な」イープリンは、ラホールで偶然出会ったセオ・ディズモンド大尉に一目惚れされる。男性の早婚が嫌われるアングロ・インド社会で育ったはずの彼も、「一輪の花のようにか弱く磁器の

7) Diver, *op. cit.*, 14-16.

8) この点に関しては、Charles Allen, *Plain Tales from the Raj: Images of British India in the Twentieth Century* (London: Futura, 1976) 157-60参照。

ように繊細な肌をしながら、新たな環境に夢中になり、はにかみつつ無意識のうちに自分と連れそうことを喜ぶ」(C.D., 14) 彼女の様子に、浮き足立ってしまう。イーブリンも月の光りに照らされたジャハンギール皇帝夫妻の霊廟の美しさにロマンチックな幻想を抱いたのか、メモサーヒブとしてインドで暮らすのもまんざらではない気がする。二人は、向こう見ずにも3ヶ月足らずの交際で結婚に漕ぎつける。しかし、イーブリンにとって、未熟な自分に優しい夫自身に不満はないものの、彼の配属先の辺境コハートでの暮らしは予想外に節約を強いられ、欲しいドレスを買うこともできない期待はずれのものであった。それはまだしも、彼女は新婚早々の夫が自分を置き去りにして任務に励むことには絶えられず、次のように友人のオナー・メレディスに語る：

インドは私がここコハートに来るまでは、素晴らしい地だったのよ。セオはここがラワルピンジーやラホールとは全く違うと警告したわ。でもそれは彼を傍に置くことさえできればどうでもいいように思えるの。彼をめったに傍に置けないのが問題なの。連隊がすべてを飲み込んでしまう。殿方たちはいつも軍服を着ていて、その姿でいることが好きなのよ。何よりも戦うことが好きだということが、私には腹が立つのよ。(CD 16)

このような気持ちを抱く彼女が、火事の中で部下の馬を助けようとして鎖骨を負傷し、包帯姿になった夫の姿に衝撃を受けるばかりか、適切に看護師の役目を果たせないのも無理からぬことであろう。「籠に閉じ込められたコマドリのように心を乱した」彼女は、包帯を巻き直すように頼まれても、不器用に夫の首の包帯に触れ、「ああセオ、骨が動いた！ もう二度とあなたの鎖骨に触れられない。ぞっとするわ！」(CD., 72) と叫ぶ。軍人の父親や兄たちをもつオナーに教育されても、イーブリンは自分の贅沢で赤字になる家計を立て直したり、遠征に出かけて盲目になりかけた夫の看護を担うことができず、彼や周囲の同胞を失望させる。たとえ、セオが戦闘で身体障害者になろうとも、帝国のために尽くした彼に寄り添って生きることが彼女の義務であったが、コハートから姿を消したくなる衝動にさえかられる。しかし、戦傷で床に伏す士官の夫のもとを去ることは、彼に恥をかかせるばかりではなく、植民地支配の基盤をなす帝国の「家庭」を守るメモサーヒブの威信を傷つけることである。とりわけセオのようなエリート軍人の家庭崩壊は、夫婦二人だけの問題ではなく、被支配民族に対して示しのつかない失態であり、アングロ・インド社会の公的な問題として捉えられた。それを認識しているオナーは、茫然自失としてセオのもとから逃げ出すことを口走るイーブリンに憤って非難の言葉を浴びせる：

「逃げ出すですって……どこへ、一体全体どこへ行くっていうの？」

「どこへ行くかって聞くの？ ああ、どこか、ここから離れたどこかへ——山岳地方へ行くわ。私にはできないの……ひどい傷を負ったセオの顔を見たくないの。ウィンダム少佐が言ったように彼の片目が見えなくなるかもしれないなんて思うと……もし今すぐ貴女が私をどこかへ連れて行ってくれたら、……オリバー大尉夫人が喜んで彼の看護をするわよ。もしセオが元気になったら、彼も山岳地方に来れると思うわ。でももし……もし彼の目が見えなくなったら……」

オナーはもう我慢できなくなった。かがんでイーブリンの肩をつかみ、彼女を正気にして人情を取り戻させようと、その肩を激しく揺さぶった……

「よくもそんな風に物が言えたわね……よくもそんな卑劣なことを思い付いたものだわ！ 勿論、ほ

んの少しでもセオを苦痛から救うために命がけになろうとする人は他にもいるから、あんたは妻の座をその人に譲れるわよ、でもあんたの持ち場じゃないの？……私はあんたをここから逃げ出させないわよ、どんなに怖気づいてもセオの傍にいさせるわよ。(CD., 270-71)

オナーに叱責されたイーブリンは気を取り直して不器用ながらも夫の看護に励むが、セオは盲目になる可能性のある自分から彼女が逃げ出したくなかったことを知り失望する。そんな彼が自分を「苦痛から救うために命がけになろうとする」オナーに魅かれていくのも無理からぬことであった。そのような経緯の中で、孤独になったイーブリンは、以前のセオの忠告を忘れて、コハートを訪れていた「全くのならず者」オーウェン・クレスニーとその妹との交際を再開する。⁹⁾

オーウェンがイーブリンに優しく接するのは、単に彼女を誘惑して恨みのあるセオに復讐を果たしたいためであった。そんなことを知らない彼女は彼の奸計にはまって借金を重ね、男女関係さえ迫られる。最終的には、オナーのアドバイスに従ってオーウェンに借金を返し絶交することを告げに行くが、彼女はその帰り道でイスラムの狂信者の標的にされ、一命を落とすことになる。事の次第を知ったセオは瀕死の彼女と和解し、その亡骸を手厚く葬る。犯人は直ちに捕えられて処刑されるが、傷心のセオは一年間の休暇をとってイギリスへ帰国する。

「仕事に献身する」メムサーヒブや北西辺境州を守る帝国軍人にとって、イーブリンが反徒の凶弾に倒れ、オナー・メレディスが1年後にコハートに戻ったセオの後妻に納まるという筋書きは、どう捉えられたであろうか。イーブリンの悲惨な運命に同情しつつ、物語から彼女が抹殺されたことに安堵感を禁じえなかったかもしれない。厳しい見方をする読者は、イーブリンの悲惨な最期は作者の「遊び」に夢中になるメムサーヒブへの「罰」だと感じたであろう。しかし、インド体験のない女性読者は、彼女もイギリスでそれなりの男性と結ばれていたなら、夫や親族の保護下で「家庭の天使」になりえたと同情し、彼女への「罰」はあまりにも苛酷であるという印象を否めなかったとも思われる。そもそも彼女には軽率なところはあっても、メムサーヒブにありがちな人種的な偏見もなければ、他人の不幸を笑うような意地悪さもない。騙されやすいのも人の良さの裏返しであろう。夫に内緒でオーウェンとの交際を楽しんだとはいえ、彼と男女関係を結んだわけでもない。彼女の貞操観は妻子ある男性と不倫を楽しむパメラやスレード夫人よりも、はるかに健全であると言えよう。また、イーブリンが「全くのならず者」兄妹との「遊び」に夢中になったり、彼らの罠にはまったのも、メムサーヒブとしての心構えも十分に授けずに「観光客」であった彼女を妻にしたセオにも責任があると言えよう。そのように解釈すれば、やはりダイヴァーはアングロ・インド社会の男女関係についてスティール夫人よりは、女性側に寛容なように思われる。¹⁰⁾ 『インドのイギリス女性』では、キプリングに批判されたジルも次

9) やや色黒のオーウェンには、インド人の血が4分の1混じっていることが仄めかされているが、イーブリンがそれを認識していたかどうかは明言されていない。CD., 43-44, 49参照。

10) 色恋沙汰の嫌いなスティール夫人は、アングロ・インド社会での夫婦間の揉め事は「常に女性の方から起こす」と述べている。Flora Annie Steel, *The Garden of Fidelity: The Autobiography of Flora Annie Steel 1847-1929* (London: Macmillan, 1929) 290参照。

のように弁護されている：

……確かに婦人たちは大いに快樂を求め、休暇を楽しむ。しかし、そのような傾向は明らかに男性たちにも共有されている……世間はジルのような遊びに夢中になる類の女性に審判を下す時、彼女を今の有様にした夫にも責任があると言えることを見逃しがちである。自分の妻の評判に無頓着であったり、彼だけが妻に認識させられるのに、……彼女の行動に関心を寄せるのを面倒だと思っただらどうなるのか。妻に全く好き勝手にさせ、困難な状況下で盲滅法に歩かせてしまったら、自分の不注意の報いだと思う羽目になる……妻が愚かで軽率だと非難するなら、夫の方でも彼女に賢明な態度を示さず無関心であったことを斟酌するべきだ……。

つまるところ、私たちの誰が最初に石をジルに投げつけるべきだというのか。¹¹⁾

「遊び」に夢中になるイギリス女性をダイヴァーが弁護するのは、結婚のためにインドへ渡ったメムサーヒブの実情に理解があったゆえでもある。偶然セオに出会ったイーブリンはともかく、中産階級の若いイギリス女性たちがインドに「漁船団」を組んで到来したのは、「余った女たち」という言葉が示唆するように、大英帝国の進展に伴って適齢期の男性が海外に流出し、本国で彼女たちが結婚市場であぶれがちであったことによる。それは自らがインドで伴侶を得た作者にとって同情すべき現象であったはずである。インドで戦争の犠牲者にならずとも彼女たちは——本国の同胞に比べれば——十分な医療や娯楽に恵まれず、命がけで生み育てた子供も、教育を受けさせるために幼いうちから本国の親類に預けなくてはならなかった。また本格的な医療制度や交通網が整う第一次大戦前後まで、インドのイギリス人は熱病、マラリア、コレラ、チフス等の伝染病の犠牲になりがちで、その乳幼児の死亡率は本国の倍であった。¹²⁾ 帝国の威信にかかわるためか、ダイヴァーやスティール夫人はあまり語らないが、苛酷な環境下で精神を病むイギリス人も存在した。¹³⁾ そのような背景を考慮すれば、「遊び」に夢中になるメムサーヒブたちや、浮気が止まらぬジャスパー・イングリズにさえ石が投げつけられないのも納得できる。

イーブリンの悲劇が、メムサーヒブに強靱な精神力と帝国への間接的な献身が期待されたことを伝えるためのエピソードであることは言うまでもない。しかし、オナーやオリバー大尉夫人があまりにも理想的な帝国軍人の娘や妻らしく描かれているために、イーブリンが彼女たちの引き立て役であるような印象も否めない。オナーがこの小説の続編『ディズモンドの娘』で帝国支配に従事する息子たちや娘をもつ模範的なメムサーヒブとして再登場することからも、作者が物語の舞台の中心に据えたかったのは、インドで「遊び」に夢中になるよりも「仕事に献身する」イギリス女性であったことは明らかである。

11) Diver, *op. cit.*, 90–91.

12) Nupur Chaudhuri, “Memsahibs and Motherhood in Nineteenth-Century Colonial India”, *Victorian Studies*, 31, no.4 (1988) 527–28 参照.

13) Charles Allen, *op. cit.*, 208–10; Margaret MacMillan, *Women of the Raj* (New York: Thames and Hudson, 1988) 86–88 参照.

III

「ディズモンドの娘」というのは、セオ・ディズモンドとオナーの間に生まれたシーアを指す。セオの前妻のイーブリンが「遊び」に夢中になるMEMサーヒブに分類されるとすれば、戦闘時には従軍看護師の役割を果たすオナー・シーア母娘は帝国を支える軍人の母、妻としての「仕事に献身する」MEMサーヒブの代表であろう。彼女たちが、ステレオタイプ的なMEMサーヒブと異なる性格や志をもつのは、インドに骨を埋める覚悟のある軍人一族の出身であり、山岳地方の反徒との紛争が絶えない北西辺境州での生活を余儀なくされたことにもよる。比較的安全な都市にいるMEMサーヒブの日常の義務といえば、同胞の客人をもてなしたり、本国の家庭的雰囲気醸成のために英国風に作られた庭やインド人の召使を管理することくらいであったが、度々戦場に向かう夫や父親をもつオナーやシーアは、従軍看護師役もこなせば、拳銃の扱いにも慣れていた。いかに、網の目のようにイギリスの軍隊や警察の管理が行き届いていたとしても、「殺人が横行する邪悪な地」(CD., 6)に一人で戻るオナーにはそれなりの気概と目的意識があった。退役後の生活を本国で送る父親メレディスが彼女のインド行きを許したのも、「少なくとも2年間は、険しかろうが安楽であろうが、兄たちと運命を共にしたいという娘の懇願に屈し」(CD., 4)、「彼自身に授けられた活発な精神が娘にもあることに共鳴した」(CD., 4)からである。コハートでオナーがセオを救うために、狂犬を撃ち殺したり、¹⁴⁾ イーブリンに代って彼の看病をするのも、大英帝国に奉仕しようとする彼女の心意気を体現している。彼女は運よくセオを射止めた友人のイーブリンに嫉妬することもなく、弱気な妻のためにコハートの任務を降りようとするセオを踏みとどまらせようと説得したり、夫婦の仲を取り繕うためにあらゆる努力をする。最終的にセオとオナーが結ばれるという物語の顛末も不自然ではなく、「仕事に献身する」MEMサーヒブを称える作者の心情が投影されている。そのようなMEMサーヒブ礼賛は、ティラー戦争(Tirah Campaign, 1897~98年)を背景にした『ディズモンドの娘』では戦士の気質をもつイギリス女性にも拡大され、作者の反フェミニズムに矛盾しているように感じられる。¹⁵⁾

シーアがイギリスでの教育を終えて、生まれ故郷のインドへ戻ることは当時のアングロ・インド社会の一員としてごくありふれた人生の選択であるが、一族が住む北西辺境州は相変わらず紛争の絶えない危険地帯であった。しかし、母親以上に気丈な彼女は運悪く居合わせたガリスタン砦で、¹⁶⁾ イスラム軍団が近づきつつあるという噂に怯むこともなく「男になり

14) メレディス大佐がオナーに「男のように正確に首尾よく」拳銃を使う練習をさせたことや、ハト打ちを楽しむ彼女やオリバー大尉夫人、コノリー夫人の射撃能力は男性並であったことが描写されている。CD., 4; VC., 52参照。

15) ダイヴァーの反フェミニズムについては、David Deirdre, *Rule Britannia: Women, Empire, and Victorian Writing* (New York: Cornell UP, 1995) 162-65参照。

16) 『ディズモンドの娘』の「作者の注」には、ガリスタン砦に婦女子が存在したことも含めて、物語の事件は事実に基づいていることが記されている。(DD., v) 実際には、1897年9月17日付けの『ニューヨーク・タイムズ』には、集中砲火を浴びるガリスタン砦の中に4人子持ちのデ・ヴォー少佐(Major Des Voeux)夫人と二人の子守女性がいて、彼女たちも軍医と共に負傷兵の看護をしたという記事が掲載されている。ティラー戦争を始めとする19世紀末の北西辺境州におけるイギリス軍とアフガン諸民族との戦いについては、Lawrence James, *Raj: The Making and Unmaking of British India* (New York: St. Martin Griffin, 1997) 394-416参照。

たくてしかたがなくなり」(DD., 416)、身の危険を覚悟で従軍看護師役を引き受ける。さすがに戦闘開始後の「痛みや血まみれの光景」は、数回の救急救命講座しか受けていない彼女を仰天させるが、ほどなく軍医の期待通りにその包帯を巻く手つきも上達する。「静脈にすんでのところで命中した弾丸にかすり傷を負わされる」(DD., 433) 羽目になっても「彼女は恐れをなすどころか、妙に興奮し」、安全な場所に避難することもなく負傷兵の看護を続け、その功績を称えられてロイヤル赤十字章を授かる。後にシーアの夫になるヴィンセント・レイがティラー戦争で士官らしく指揮を取れたのは、密かに愛するシーアが銃後で彼を支えたためであった。そもそも「内気で感受性豊かな」ヴィンセントが陸軍士官学校サンドハーストを中退せずに軍人の道を選んだもの、次のようなシーアの言葉が彼を刺激したからでもあった：

軍人のような職業はないわ……軍人であるということは素晴らしいことだわ。少なくとも——私にはね、私たちディズモンド家の人々も、メレディス一族もみんな軍人よ。男の子たちはほとんど全員が軍人になり、女の子は軍人と結婚するのよ。私もそうするために自分の総てを捧げるわ。

(DD., 136)

周囲の期待通りヴィンセントはインドの軍隊に入るが、インドの哲学や宗教に興味を覚える彼にとって、軍隊の単純な物の考え方や日課は肌に合わなかった。シーアへの報われない恋ももどかしく厭世的な気分になった彼は、「神聖さと知恵をもつヨガ行者」として有名なタルクル・ダス卿とカシミールの谷をさまよう。そんなヴィンセントの「ヒンドゥー化」を恐れたシーアは、彼を軍隊へ呼び戻そうと「そこで本当に何か偉大な真実を見つけたのか、あるいは俗事や特に軍務から逃げ出しているだけなのか」(DD., 316) と道中の彼に手紙で呼びかけるが、「その非現実のただ中の現実」——自己の真実——を見極めるための旅を即座に断念させることはできなかった。しかし、ヒンドゥーの聖地ケダル・ナス (Kedar Nath) の手前で、ヴィンセントは女性修行者が神と一体になるために谷に身投げする光景に衝撃を受け「できることなら、ヒンドゥーになるな」(DD., 241) というシーアの警告や手紙に託された批判が的を射たものであることを悟り、軍務に戻る気になる。その後ガリスタン砦で勇敢に戦い、シーアとの婚約に漕ぎつけるが、遠征の最中にイスラム反徒から狙撃され左の膝から下を失う羽目になる。身体障害者となって軍人でいられなくなった彼はセオから警察にポストを与えられるが、シーアとの結婚をあきらめかけて絶望する。彼の弱気にセオは怒るが、シーアはヴィンセントを見捨てられなかった。二人は結婚し、立派な軍人となる息子たちを育てつつ、インド帝国のために献身する人生を歩む。

IV

北西辺境州を守る軍人の恋人や夫を支えるオナーやシーアの言動は、「女性が男性の精神的指導者になり得る」というヴィクトリア朝的な理念を反映したもので、男女の役割分担を超えるフェミニズムを支持するものとは言えない。いかに彼女たちが敵の銃弾に怯まぬ強靱

な精神の持ち主といえども、物語の中で矢面に立つのは常に男性であり、女性は守られるべき存在である。確かに従軍看護師役を果たすメムサーヒブたちは、物語の立役者のようにも感じられるが、作者は『ヴィクトリア勲章のディズモンド大尉』の結末で、オナーに「いかに自分が強く情熱的な精神をもつ女でも、他のすべての男たちの中から選び出したこの男セオは、肉体、精神共に自分よりも優れている……本質的には女である故にそれを知って言いようのない喜びを感じた」(CD., 381)と告白させ、主人公を立てる文言を付け加えている。また、タイトルはシーアを指すが、『ディズモンドの娘』の主人公はあくまでもヴィンセントであり、彼女の活躍は舞台裏のものである。なるほど二つの小説に登場するメムサーヒブたちの多くは、戦士の気質を内面化しているものの、G.A. ヘンティ (George Alfred Henty, 1830~1902年)の同時期の北西辺境州を舞台にした『兵士の娘』(*A Soldier's Daughter*, 1906年)のヒロイン、ニータ・アクワース嬢 (Miss Nita Ackworth)のごとく、敵兵を銃で撃ち殺したり、アフガンの砦から単独で捕虜になった恋人を助け出し、男装姿で険しい山や谷を逃げ続けるような行動は許されていない。¹⁷⁾ ダイヴァーが『ディズモンドの娘』を執筆するにあたってヘンティのこの物語を参考にした可能性は否定できないが、男女の役割を転倒したようなニータの活躍は——その信憑性はさておき——「白人女性の責務」を超えた受け入れ難いものであったに違いない。彼女が尊重するメムサーヒブの「仕事」とは、あくまでも「女性」としての役割を担うものであり、メムサーヒブが従軍看護師役を担うことも帝国の家政の延長と考えられた。

しかし、実際には19世紀末から帝国主義の拡大と医学の発展に伴い、看護を「家政の延長」ではなく職業とする看護師や女医が植民地に呼び寄せられるようになった。当初は東インド会社も帝国政府も政策上、インド人の宗教や私的な領域に立ち入ることを好まず、彼らの医療や衛生問題に関与したのは、布教を目的としたミッショナリーのみであった。軍属の医師や公立の医療機関は原住民ではなく、主にイギリスの支配者やその家族の医療を担うものだった。しかし道路や交通手段の発達に伴い、インド人居住地に発生するコレラやペスト等の伝染病にイギリス人が罹患する可能性が高まると、帝国政府は原住民に対する衛生管理や医療行為の必要性を感じるようになった。そこで問題になったのは、良家のイスラムやヒンドゥーの女性たちが一般的に男性の診察を拒み、彼女の夫たちも自分の妻がゼナナ (婦人部屋) から外に出て家族以外の男性の目に曝されることを禁じた慣習 (パルダ制度) であった。¹⁸⁾ 改宗を拒まぬアウトカーストの貧民や、イギリス人と交流できるような身分のインド人男性の医療は、ミッショナリーや軍属の医師に任せられても、宗教的戒律を守るインド女性たちをイギリスの男性医師に診察させることはタブー視された。とはいえ、女性ならば看

17) G.A. Henty, *A Soldier's Daughter and Other Stories* (London: Blackie and Son, 1906) 参照。

18) あるイスラムの少女妻は、難産に苦しむ自分を見かねた夫がヨーロッパの外科医の診察を許可したにもかかわらず、それを拒み身を挺して産室のドアを塞いだ。その折、周囲の女性たちはその気持ちを重んじて、ドアの前の彼女の体に触れず、少女妻が絶命するのを傍観したという。このエピソードは、信仰心の厚いインド女性が他人の男性の診察を受けるよりは死を選ぶ例として、しばしば話題にされる。Anil Kumar, *Medicine and the Raj: British Medical Policy in India 1836-1911* (New Delhi: Sage, 1998) 54参照。

護師も医師もミッションナリーに伴って原住民の社会に介入することや、ゼナナへの出入りを禁じられなかった。そのためにエジンバラ大学医学部から学位を授けられなかったイーデリス・ピーチ（Edith Pechey, 1845～1908年）もあえてインドへ渡って現地の女性の医療を担い、キャリアを開発することができた。彼女を見習って続々とミッションナリーと共にインドへやって来たイギリスの女医たちは、原住民から次第にその業績を認められるようになる。そのような風潮こそ「帝国に白人女性の居場所はない」という説を覆すものであり、ダイヴァーは、インドで医療に貢献する女性たちを次のように称えている：

神聖な癒しの技術に優れた女性なら、失望や幻滅的な無関心に面しても、石壁を突き抜ける勢いで仕事に励み、彼女の語彙から「不可能」という弱気な言葉を消去すれば、インド帝国は無尽蔵な分野の仕事を提供してくれる。人や建物が密集した都市は、肉体的な衰弱や病の温床である。塵や蠅は国中の至る所にコレラやチフスをまき散らす……

この大量の病人を癒す仕事は、インドの原住民、欧亜混血、イギリス人の医療に携わる女性たちのみで一致団結してこなされている。このような状況は40年前には奇跡的で有りそうもないことだと思われた。¹⁹⁾

『ヴィクトリア勲章のデイズモンド』や『デイズモンドの娘』の戦闘時におけるメムサーヒブたちの看護活動は、医療のプロとしての役割を果たすものではない。ダイヴァーを反フェミニストと解釈するならば、レディーと見なされた既婚女性、とりわけ帝国支配者の妻たちが賃金を得るための職業に就くことは論外であったに違いない。オナー、オリバー大尉夫人は資格をもつ看護師ではなく、平和時の彼女たちの役割は、妻、母として家庭を守ることであった。子どもに恵まれない男まさりのオリバー大尉夫人も、連隊の若い軍人たちの面倒をみる「母親」役を担わされている。しかし、男性の領域を侵犯しないと考えられた看護師はさておき、上記のダイヴァーのコメントの「医療に携わる女性たち」の中には、仕事を優先して独身で活躍する女性もあれば、参政権を要求したフェミニスト女医も含まれていた。それはイギリスのパイオニア女医に関する研究書が語るところであり、²⁰⁾ ダイヴァーも彼女たちの経歴を認識していたはずである。家政の延長とは捉え難く男性と同じ社会的地位や収入をめざす女医という職業は、帝国主義のモットーである家父長制を損なう可能性のあるフェミニズムに結びついた。そのためにイギリス本国で当初、ありとあらゆる手段や口実を駆使して、女医の養成や開業が妨げられたエピソードはあまりにも有名である。にもかかわらず反フェミニストの帝国主義者さえ、女医たちのインドでの活躍を認めるようになり、彼女たちを応援すべく女性専門病院の設立を援助したり、インド女性にも医学教育を奨励するようになった歴史的な事実は、正に帝国主義が孕む矛盾を露呈するものであろう。このような

19) Diver, *op. cit.*, 103-06.,

20) 例えば、プーナのマハラニ（王妃）の要請で、病気になった折のインド女性の窮状をヴィクトリア女王に進言して、本格的なインド女性の医療援助を促進したエリザベス・ビールビー女医（Dr. Elizabeth Bielby）は生涯独身を通し、インド北部で活躍した。一方、ピーチ女医は改革主義者のイギリス男性とインドで出会って結婚し帰国後、女子参政権運動に加わった。イギリスのパイオニア女医については Margaret Balfour and Ruth Young, *The Work of Medical Women in India* (London: Oxford UP, 1929) 13-32; Kumari Jayawardena, *The White Woman's Other Burden: Western Women and South Asia during British Colonial Rule* (New York: Routledge, 1995) 75-90 参照。

家父長制を重んじるの帝国主義と反フェミニズム,²¹⁾ フェミニズムの複雑な絡み合いは、ダイヴァーの作品の中では『若者の船』に登場する女医グレイス・ヨロンデ (Grace Yolonde) の言動に窺うことができる。²²⁾

V

コハートで自らが経営するミッション病院でインド人の男性医師、アメリカ人の女性助手、欧亜混血の薬剤師と共に医療活動に携わるグレイス・ヨロンデは、30代半ばの「口元に笑みをたたえつつ真剣な細面の顔つきをした有能な」ミッションナリー女医である。彼女の病院は、公立のステーション病院 (station hospital) でもダファリン基金の援助を受けるダファリン病院でもないために、²³⁾ 患者を選び好みすることもなく自由な診療を原住民に施すことができた。ミッションナリー所属と言えば、土着の信仰に拘る原住民から毛嫌いされそうなものの、ヒンドゥー教のグル (導師)、スリ・サマンダを尊敬する彼女は「狭義にはミッションナリーではなかった」。²⁴⁾ そのために、幼児婚をはじめとする女性の人権を踏みしめるようなヒンドゥーの因習には立ち向かうものの、原住民への積極的な布教活動はしない。そのような彼女の医療活動が原住民の信頼を得たことは、次のように述べられている：

イギリスの同胞はめったにグレイスの医療ミッションのバンガローに立ち寄らなかった。しかしインド女性の多数が彼女を熱愛した。彼女は自らの医療技術でインド女性たちの治療をした。国境地方ほど敵意や疑惑が根深い地域はなかったが、素晴らしい人格をもつ彼女は、インド女性の無知や運命主義と戦うことができた。

グレイスはインドの辺境の片隅で、イギリスの体面のために、善意のお偉いメムサーヒブよりも多くのことを成し遂げていた。(SY., 181)

グレイスが扱う患者は主に病気のインド女性や子どもたちであったが、医療設備の不十分なコハートで彼女が10年経営しているミッション病院には、白内障患者、「夫に鼻を切られた」インド女性、「姑にヤケドを負わされた少女妻」、「宿敵に傷つけられたパターン人」等の本来女医向きではないとされた外科治療を求める患者も集まった。そのために本国では男性医師に任せるような観血的治療も断りきれず、彼女は10年間ミッション病院を取り仕切るうちに「熟練した外科医」として、ミッションナリー嫌いの警察長官ジョン・リンチから負

21) 一口に「反フェミニズム」とは言っても、エドワード朝期 (1901～1910年) の反フェミニストに分類される人々の女性観は多種多様で、既婚女性が職業に就くことを認めるような意見もあった。この点に関しては、*Anti-Feminism in Edwardian Literature*, ed. Lucy Delap & Ann Heilmann (London: Thoemmes Continuum, 1997) I, v-lx 参照。

22) グレイスは『詩人が通る』(*The Singer Passes*, 1934)、『夢は果てしなく』(*The Dream Prevails*, 1939) にも登場している。

23) 当時のインドの病院については、Alice Wilkinson, *Brief History of Nursing in India and Pakistan* (New Delhi: The Trained Nurses' Association, 1958) 1-52 参照。

24) Diver, *The Dream Prevails: A Story of India* (Boston: Houghton Mifflin, 1938) 12. イギリスの女医がミッションナリーに同伴しなければ、インドでの医療活動が困難であった事情については、Geraldine Forbes, "Medical Careers and Health Care for Indian Women: Patters of Control", *Women's History Review*, III, no.4, 1994, 518 参照。

傷した部下の診療を任されるほど評価されるようになる。「イギリスの同胞はめったにグレイスの医療ミッションのバンガローに立ち寄りなかつた」というのも、彼らが怪我をしたり病気の原住民のいる病院に出入りしたくないため、実際には彼女はイギリス人居住地区に出向いてメムサーヒブたちの病気や怪我、妊娠や出産にともなう医療を担当している。原住民たちにとって、アングロ・インド社会との付き合いよりも病院の仕事を優先し、西洋医学で自分たちを土着の迷信的な医療や産婆術から解放して病を癒してくれる彼女は、「女神」のように映った。

グレイスの志をよく理解しないジョン・リンチが、7年ほど前にカシミール山麓で出会ったばかりの彼女にプロポーズしたのは、独立精神をもって医療活動に夢中になる彼女がまぶしく、帝国主義の正当性を信じて疑わない自分にふさわしい女性に感じられた故であろうか。この恋愛エピソードは詳述されていないが、医療活動に専念していた若い彼女が、想像力が乏しく国境を守るという仕事しか眼中にない彼との結婚を拒否したのも当然であろう。しかるに、35歳を目前にした彼女が久しぶりに出会ったジョンのプロポーズを受け入れ、病院経営を放棄するという物語の展開は、作者の反フェミニズムを反映しているようにも感じられる。確かにグレイスは、フェニスト女医のオードレイとは異なり、結婚も母親になることも拒否しない女性性をもつ女性であり、家父長制を重んじる帝国主義の加担者とも言える。結婚後も認められたボランティア的な医療活動も、インド人の家庭に入り込める故に、夫の情報収集の任務を補助するものとも見なされた。しかし、「インド女性のため」という彼女の活動は、時にイギリスのインド支配の方針とは齟齬をきたすもので、夫婦関係をもつれさせた。このことは『詩人が通る』の中では、ジョンがオックスフォード大学出のラマナンドの妻スニタの誘拐事件を2年間に渡って捜査し、グレイスにもその探索や救出を認める一方で、上流階級のジャット族の家へ無理やり嫁がされたランジーニの家出には協力しないというエピソードに浮き彫りにされている。

警察長官のジョンには、カーストの掟破りとはいえアーリア・サマージ式に結婚したスニタがさらわれ、グルガオンの地主（ザミンダー）に嫁として売り飛ばされた事件は犯罪と見なされた。そのために、グレイスが女医として地主の家に住む婦人たちの様子を探り、自分の配下と共に焼き殺されかけたスニタの救出に一役買うことは危険を伴っても「白人女性の責務」として許可できた。彼女がスニタを助ける際に「警察長官のジョン・リンチの妻である」と身分を明かすのも、彼の意向にかなったものである。しかし、花嫁の意志に反したとしても正式にジャット族の一家へ嫁いだランジーニの家出を手助けすることは、ヒンドゥーの上流階級の結婚問題に介入する行為であり、原住民の宗教的な儀礼や民事には深入りしないことをモットーとする帝国主義の方針にそぐわなかつた。いかに「インド女性の解放のため」とはいえ、グレイスがランジーニを婚家先から連れ出して自分の家にかくまうことは、ジョンには許せない。インド女性の教育問題に関心のないジョンは、ランジーニが教養のある娘でも、自分の地位を危険に曝してまで彼女を助ける気にはなれない。そのために、彼は家出計画をザミンダーに告げ口するとグレイスを脅迫し、夫婦の仲はぎくしゃくする。最終的にはジョンが自分の警告を無視して行動を起こす妻を黙認したおかげで、ランジーニはグ

レイスの病院助手のアルーナ、チャープティの協力を得て家出に成功し、ジョンの同僚ランス・ディズモンドの家へ身を寄せる。このグレイス側の勝利は、帝国主義がインド女性の解放よりも上流階級のインド人男性との友好を優先する男性本位なものであることへの作者の抵抗を窺わせる興味深いエピソードである。

VI

帝国支配者である夫の欺瞞に怒りその指示を無視するグレイスの態度は、スティール夫人がインド高等文官の夫の立場を顧みずに、パンジャブの教育行政に口を出しすぎて当局としばしばトラブルを起こしたエピソードを連想させる。²⁵⁾ ことインド女性を助ける「白人女性の責務」というテーマに関しては、ダイヴァーもスティール夫人も家父長を立てることを忘れがちで、両者の帝国主義とフェミニズム、反フェミニズムの関係は複雑に絡み合う。それは、彼女たちが異なる女性観をもつ故でもあろうが、19世紀の後半から台頭したインドのナショナリズムや女性の権利拡大問題に遭遇して、男性たちの軍事力や権威主義に依拠する帝国主義の言説では、イギリスの搾取や人種差別に目覚めたインド人を臣下におくことができないことを悟ったからでもあろう。

インド人の反英感情を認識したメムサーヒブ作家たちが、大英帝国の安泰のために掲げるべきは、女性ミッショナリーが唱えた「国際的な姉妹愛」であることを悟り始めたことは、ゼナナへ立ち入る女性ミッソナリーや女医の嫌いなスティールが²⁶⁾、ミッション・スクールの価値を認めたことや、ダイヴァーがオードレイやグレイス、シーアを通してインド女性に対する「姉妹愛」や「連帯」を強調していることから理解できる。それは「イギリス女性たちが高貴な生まれのインド女性たちと友だちになれば、イギリス、インド双方の男どもが犯した誤りの半分以上を改善できる」²⁷⁾ というアルーナの祖父ラクシュマンの言葉や、グレイスが次のように彼に語る内容に符合している：

私は、インド女性は——滅私奉公的に奮闘し、精神的な強さは表に出さないが——そのうちにバラモンの権力を弱め、ヴェエダの時代の高貴な自由を取り戻すと確信しています。勿論それを達成するには長い年月がかかるし、西洋、東洋の総ての女性が忠実に協力し合うことが必要でしょう。彼女たちの団結こそ、そうなることを選択すれば、インドの歴史、世界の歴史さえ変えることができるでしょう。²⁸⁾

このようなフェミニズムとも思われるような発想は、「女性の道徳的な文化こそ、インド

25) スティール夫人がパンジャブ大学の不正な卒業証書授与を批判したために、彼女の夫は左遷される羽目になった。このエピソードについては、Flora Annie Steel, *op. cit.*, 73; Patt Barr, *The Memsahibs: The Women of Victorian India* (London: Secker & Warburg 1976) 159-60参照。

26) 彼女たちをスティール夫人が嫌うのは、ゼナナに立ち入る女医やミッソナリーの活動がバルダ制度を守る女性をゼナナに閉じ込め続け、インドのフェミニズム運動を妨害することになるからだとする。Patt Barr, *op. cit.*, 184参照。

27) Diver, *Far to Seek: A Romance of England and India* (Boston: Houghton Mifflin, 1921) 193.

28) Diver, *The Singer Passes: An Indian Tapestry* (New York: Dodd Mead, 1934) 90-91.

を長年の因習から引っ張り出すのに必要だ。女性は弱い存在かもしれないが、人間を思い通りに作り上げる力は女性のものだ²⁹⁾ というダイヴァーの信念に通じる。しかし、「高貴な生まれのインド女性」という言葉が示唆しているように、イギリス女性が姉妹愛の対象にするのは、英語を解するような中産階級以上のインド女性であり、社会の底辺に位置する女性にまで及ぶものではない。このことは、シーアが幼子を抱えた乞食女が自分のもとへ保護を求めて来ることに困惑したり、グレイスが親身に援助するのも、アルーナやランジーニ、スニタのように教育のあるインド女性であることが如実に物語っている。また、スティール夫人も古い因習に縛られるインド女性に同情する数々の物語を執筆しているものの、彼女が好むインド女性と言えば、ゼナナから出て教育を受けることのできた進歩的な女性であり、イギリス男性の妾や娼婦の救済は関心外であったように思われる。しからば、帝国主義を支持するイギリス女性が唱えた「世界的な姉妹愛」とは階級主義にも基づくもので、アントワネット・バートンが主張するように、³⁰⁾ 「インド女性をゼナナから引っ張り出す」ことのできたイギリス女性の権利を要求するためのスローガンに過ぎなかったのであろうか。

確かに、医療活動に関してはイギリスの女医は、インド女性の医学教育に貢献し、多くのインド人看護師や女医の養成にも取り組んだ。再婚を禁じられた多くのヒンドゥーの寡婦や孤児の少女が惨めな生活や娼婦への転落を免れたのも、インド女性のための医療教育を促進したダファリン基金や、その恩恵に預かったイギリスの医療従事者のおかげである。例えば、ラクマバイ (Dr. Rukhmabai, 1864-1955年) が幼児婚を破棄し、³¹⁾ ロンドン女子医学専門学校へ入学できた背景には、彼女の訴訟に協力を惜まず帝国政府に異議を唱えたピーチ女医たちの支援があった。ラクマバイと同様に欧米で医学を学んだアナンダバーイ・ジョシー (Anandabai Joshee, 1865-87) もミッシヨナリーの友人があったと言われる。³²⁾ これらのインド、イギリス女性たちの中には「姉妹愛」のような心の交流があったであろう。しかし、イギリスの女医たちはインド女性がイギリスで学位を取らない限り自分たちと肩を並べるレベルになれないことをどう感じていたのであろうか。実際に、ハイマヴァティ・セン (Haimavati Sen) のように、³³⁾ いくら医術に優れた名医であってもインドでの医学教育しか受けられなかったインド女性は、「病院助手」(hospital assistant) と見なされ、イギリスの女医と同等の資格や待遇を得ることができなかった。

『遙か遠くを求めて』、『詩人が通る』に登場するアルーナはオックスフォード大学へ留学しイギリスの友人ができたが、医学に関しては学位がなく、帰国後グレイスの援助を受けて

29) Diver, *The Englishwoman in India*, 99-100.

30) Antoinette Burton, "Feminist Quest for Identity: British Imperial Suffragism and 'Global Sisterhood,' 1900-1915", *Journal of Women's History*, 3 (2), 1991, 46-81 参照.

31) インド学で有名なマックス・ミュラー (Max Müller, 1823 ~ 1900年) も注目したこの訴訟事件については, Jayawardena, *op. cit.*, 85-87 参照.

32) 但し, ジョシーは自分が通ったミッション・スクールがキリスト教を強要したことに反感を抱いたという. Diver, *The Englishwoman in India*, 224-28 参照.

33) インドのパイオニア女医については, Geraldine Forbes, *op. cit.*, 515-27 参照.

病院助手の地位に甘んじている。³⁴⁾ それはまだしもヒンドゥーの掟では、低カーストの身体に触れることは「穢れ」と見なされる故に、医療職に従事した彼女はカーストを追放され、それなりのインド人男性との結婚もできなくなる。ならば、混血のイギリス男爵ロイに嫁げばよいものの、グレイスもシーアもインド人との混血を好まず、アルーナとロイの結婚に反対する。インド女性に「姉妹愛」を呼びかけながら、彼女たちを自分たちの親族にしたいわけではないというのが当時の一般的なイギリス女性の本音であった。実際にあえてイギリス人の妻となったインド女性や、ハイマヴァティ・センのような立場に置かれたインドの女医たちは、どれほどイギリス女性に対して「姉妹愛」を感じる事ができたのであろうか。ちなみに、辺鄙な貧しい農村に住む文盲のインド女性にとって意志の疎通もままならぬイギリス女性は「姉妹愛」の対象とはなり得ず、厳しい年貢を取り立てる徴税人の共犯とも感じられたであろう。

この問題に関しては、さらに西洋の教育を受けて女性解放に目覚めたインド女性の中には、サロジーニ・ナイドゥー (Sarojini Naidu, 1879~1949年) のようにインドの独立運動に参加した人物が存在したことも注目に値する。サロジーニのようなインド女性に「姉妹愛」を感じたイギリス女性がいたとすれば、それはインドのナショナリズムに理解を示したマーガレット・カズンズ (Margaret Cousins, 1878~1954年) やアガサ・ハリソン (Agatha Harrison, 1885~1954年)、ガンディーに心酔したマデライン・スレード (Madeline Slade, 1892~1982年) のような女性であったと思われる。『インドのイギリス女性』の中ではサロジーニの詩的な才能や女性解放運動への貢献が褒め称えられているものの、³⁵⁾ インドのナショナリズムを批判したダイヴァーが、後にガンディーの側近となった彼女に「姉妹愛」を抱き続けたとは考えられない。結局、インドからイギリスが去った史実を振り返ると、インド女性への「姉妹愛」は帝国主義を維持するための幻想的な観念であったとも言えよう。

おわりに

ムムサーヒブたちが、幾分なりとも「白人女性の重荷」を担ったことを物語化したダイヴァーは、西洋教育が因習に縛られるインド女性を解放し、自らの権利に目覚めさせたことを誇りにした。しかし、彼女の小説に登場する様々なヒンドゥーとイスラムの女性、『インドのイギリス女性』の中で紹介されるパイオニア的インド女性たちは、決して当時のイギリスのフェニスト雑誌に描かれているような受動的で奴隷のような存在ではない。貞節で家族思いの彼女たちは、ダイヴァーが重んじる「女性性」の美徳の体現者であり、不倫を楽しんだり、「遊び」に夢中になるムムサーヒブの対照としての役割を果たしているようにさえ感じられる。そのためか、「イギリス女性と高貴な生まれのインド女性」の「姉妹愛」もさほ

34) 1887年において、イギリスで学位を取った女医は月に450ルピーの給与を得たが、「病院助手」は50ルピーの収入しか得られなかったという。このようなインドの医療従事者の待遇、資格問題に関しては、Margaret Balfour and Ruth Young, *The Work of Medical Women in India* (London: Oxford UP, 1929) 102-21 参照。

35) Diver, *The Englishwoman in India*, 195-98 参照。

ど不自然ではなく、「仕事に献身する」メムサーヒブの活躍も、自分たちのフェミニズムの達成ではなく「インド女性のため」という印象を受ける。実際にインドへ渡ったイギリス女性の目的は様々であったにしろ、彼女たちがインド女性にあまり共感を抱かず、自分たちの利益を優先して伝道活動、医療や教育に熱中したことを強調するバートンの言説は、ダイヴァーの物語の解釈には適用できないように思われる。インドに長年滞在したダイヴァーには、フェミニズムに拘りすぎるバートンや、『母なるインド』(Mother India, 1927年)でインドの後進性を強調したキャサリン・メイヨー(Katherine Mayo, 1867~1940年)よりも、現地の女性の生活やヒンドゥーの古典について見識があったのではないだろうか。『インドのイギリス女性』の中では、パルダ制度がフェミニストらが強調するほどにイスラムやヒンドゥー女性を拘束するものではないことも触れられている。³⁶⁾ またインドで出産や病気を体験したダイヴァーが、インド女性への野蛮な産婆術や医療の欠如に同情し、それを救おうとしたシャーリーブ(Mary Scharlieb, 1845~1930年)のような産科医の活躍が「姉妹愛」の体現のように感じられたのも不思議ではない。「イギリス女性たちが高貴な生まれのインド女性たちと友だちになる」ことには限界があり、両者の「姉妹愛」の提唱はつまるところ「インドの歴史」をダイヴァーの意志に反する方向に導いてしまったかもしれない。しかしそのような発想は、少なからず「インド女性のため」になり、帝国に「白人女性の居場所」を作るための役割を果たしたことも歴史的な事実であったと言えよう。

【参考文献】

- Allen, Charles (ed.). *Plain Tales from the Raj: Images of British India in the Twentieth Century* (London: Futura, 1976).
- Balfour, Margaret and Ruth Young. *The Work of Medical Women in India* (London: Oxford UP, 1929).
- Barr, Patt. *The Memsahibs: The Women of Victorian India* (London: Secker & Warburg, 1976).
- Burton, Antoinette. "Feminist Quest for Identity: British Imperial Suffragism and 'Global Sisterhood' 1900-1915", *Journal of Women's History*, 3 (2), 1991, 46-81.
- Callaway, Helen. *Gender and Empire: European Women in Colonial Nigeria* (Basingstoke: Macmillan, 1987).
- Chaudhuri, Nupur. "Memsahibs and Motherhood in Nineteenth-Century Colonial India", *Victorian Studies*, 31, no.4 (1988) 527-28.
- Deirdre, David. *Rule Britannia: Women, Empire, and Victorian Writing* (New York: Cornell UP, 1995).
- Delap, Lucy and Ann Heilmann ed. *Anti-Feminism in Edwardian Literature* (London: Thoemmes Continuum, 1997) I.
- Diver, Maud. *Captain Desmond V.C.* (Edinburgh: William Blackwood & Sons, 1909).
- Diver, Maud. *The Englishwoman in India* (Edinburgh & London: William Blackwood & Sons, 1909).
- Diver, Maud. *Desmond's Daughter* (New York: G.P. Putnam's Sons, 1916).
- Diver, Maud. *Far to Seek: A Romance of England and India* (Boston: Houghton Mifflin, 1921).

36) *Ibid.*, 169-78参照。

- Diver, Maud. *Lilamani: A Study in Possibilities* (1911), ed. Ralph Crane (Oxford: Oxford UP, 2004).
- Diver, Maud. *Far to Seek: A Romance of England and India* (Boston: Houghton Mifflin, 1921).
- Diver, Maud. *Ships of Youth: A Study of Marriage in Modern India* (Edinburgh & London: Blackwood & Sons, 1931).
- Diver, Maud. *The Singer Passes: An Indian Tapestry* (New York: Dodd Mead, 1934).
- Diver, Maud. *The Dream Prevails: A Story of India* (Boston: Houghton Mifflin, 1938).
- Forbes, Geraldine. "Medical Careers and Health Care for Indian Women: Patterns of Control", *Women's History Review*, III, no.4, 1994, 515-30.
- Greenberger, Allen J. *The British Image of India: A Study in the Literature of Imperialism 1880-1960* (London: Oxford UP, 1969).
- Henty, George Alfred. *A Soldier's Daughter and Other Stories* (London: Blackie and Sons, 1906).
- James, Lawrence. *Raj: The Making and Unmaking of British India* (New York: St. Martin Griffin, 1997).
- Jayawardena, Kumari. *The White Woman's Other Burden: Western Women and South Asia during British Colonial Rule* (New York: Routledge, 1995).
- Kumar, Anil. *Medicine and the Raj: British Medical Policy in India, 1835-1911* (New Delhi: Sage, 1998).
- Howe, Susanne. *Novels of Empire* (rpt., 1949, New York: Kraus, 1971).
- Mayo, Katherine. *Mother India* (New York: Harcourt, Brace, 1927).
- Oake, Mary Elisabeth. *No Place for a White Woman* (London: Lovat Dickson, 1933).
- Steel, Flora Annie. *The Garden of Fidelity: The Autobiography of Flora Annie Steel 1847-1929* (London: Macmillan, 1929).
- Strobel, Margaret. *European Women and the Second British Empire* (Bloomington: Indiana UP, 1991).
- Wilkinson, Alice. *Brief History of Nursing in India and Pakistan* (New Delhi: The Trained Nurses' Association, 1958).